

〈研究ノート〉 資料からみる二度の来日時期：
戦前の美術教育と金龍煥

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): 朝鮮, 挿絵家, 雑誌, 新聞, 学校 キーワード (En): Korea, illustrator, magazine, newspaper, school 作成者: 牛田, あや美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000068

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



資料からみる二度の来日時期

— 戦前の美術教育と金龍煥 —

The Timing of His Two Visits to Japan as Seen from Documents

Prewar Art Education and Kim Yong-hwan

牛 田 あや美

USHIDA, Ayami

はじめに

北宏二こと金龍煥は、戦前の日本では人気の挿絵家であった。これまでに「日本における金龍煥の発見」「一九五〇年代のコチュブー雑誌『아리랑 (アリラン)』と新聞『The Korean Republic』から－」「越境する謎のマンガ家－戦中の北宏二と朝鮮動乱の金龍煥－」「日本で出版された北宏二／金龍煥の調査報告」と四本の論文を執筆した。その際、金龍煥の作品、彼のことを書いた書籍、彼のことを知っている人々とのインタビューをとおり、不思議なことがいくつか浮かび上がってきた。本稿では、金龍煥のエッセイや書籍に書かれている来日した時期を、掲載された新聞や雑誌の年代、歴史、教育背景から裏付けていく。彼は、日本へ二度来ている。一度目は戦前、学生として絵の勉強をするため、二度目は戦後、アメリカ軍の要請で仕事のために来ている。この二度の時期は、彼の挿絵家・漫画家として語るうえで正式な記録が見つかっておらず、本人の言葉と彼の周辺の人々へのインタビューに頼らざるを得ない。

入国、入学、卒業記録などはまだ見つからない。エッセイは後年まとめられているが、不正確な記憶もある。そのため、年代が異なっており混乱がある。そこで、統治下の朝鮮から日本へ留学に来た時期、国交がない時代に來た時期を明確にする。同時に、彼の受けた教育背景を年代とともに探っていく。

朝鮮での教育

1912年、日本統治下の朝鮮で金龍煥は生まれた。すでに朝鮮は、日本統治下にはいつていたからか、日本語を流暢に操っている。日本については当時の日本人よりも精通している。時代小説や偉人伝など、日本の教育を受けてなければ描けないものも多い。読者は外地出身者が挿絵を描いていたとは思わなかったに違いない。金龍煥の生まれ育った朝鮮において、日本語教育を施していたとはいえハングルの読み書きすらもできない人々が多い時代である。そのことを鑑みると、相当の高等教育を受けていたことが伺える。誕生した1912年は、すでに教育制度も日本からの横滑りで整いつつあった。日本でも子どもは働き

キーワード：朝鮮、挿絵家、雑誌、新聞、学校

Keywords : Korea, illustrator, magazine, newspaper, school

手として重宝をしていた時代であるから、さらに貧しかった朝鮮では学校に通える子どもは少なかった。日本では、義務教育を強いていたが、朝鮮においては義務教育ではなかった。そのような時代、裕福な果樹園出身の彼は小学校から通っている。

1911年8月23日付の「朝鮮教育令」によると、普通学校入学は8歳以上4年間であり、地方によっては3年間のところもあった。当時の朝鮮社会において、普通学校に進学、ましてや卒業する学生は非常に少なかった。そのなかでも、その上の高等普通学校へ進学する学生はほほいない。普通学校を卒業すると、高等普通学校へと進む。資格としては12歳以上4年間である。高等普通学校は中学校、高校の中等教育で現在の中高一貫校のようなものである。1922年4月に施行された「第二次朝鮮教育令」による高等普通学校は5年となった。彼の出身地から鑑みると、1922年4月に創立された東萊公立高等普通学校へ進学しただろう。エッセイにもそのような記述がある。自宅からは通えるとは思えないため、どこかに下宿していたのだろう。普通学校に入学した年齢を8歳と考えると12歳の時に卒業している。高等普通学校は12歳で入学し、17歳で卒業となる。それが1929年である。そこで、1929年17歳のとき、日本に来たと推測した。

1929年を巡って

彼の調査をするうえで、基本とした書籍は、2005年に富川漫画情報センターから出版された『三八線 불루스에서 성웅 이순신까지 (三八度線ブルースから聖雄李舜臣まで)』であった。この書籍は金龍煥のことを客観的にまとめてあり、現時点において最も新しい書籍で

ある。この年表によると1931年に日本へ来たと書かれている。年表と同じページに、弟の金義煥と海水浴姿の二人が海をバックにした写真が掲載されている。そこには「1930年江の島にて」とある。この写真は、1979年4月21日付の新聞『統一日報』にも掲載されている。そこには「1936年」と記されている。写真はモノクロで印刷が鮮明でないが、左が弟の金義煥、右が金龍煥と判別できる。書籍の年表「1930年」であると、弟の金義煥はもっと幼いはずである。そのため、1931年来日したのは誤植であるだろう。

私が東京に来て三年目の一九三一年に、西荻窪に開校したばかりの私立帝国美術学校（帝国大）に梁君と二人で入ることができた¹⁾。

やはりこの一文からみても、1929年に日本へ来たと考えていいだろう。

川端画学校と帝国美術学校

金龍煥は、挿絵家として活躍したが、挿絵家になるために来たのかは不明である。彼の目的は、洋画の技術を学ぶためであった。1903年に創立された官立の東京美術学校（現・東京芸術大学）へ進学するためである。すでに朝鮮から留学性が在籍していた。

東京美術学校は、専門学校令により高等教育を提供する専門学校として位置づけられた。その予備科への入学資格は17歳以上26歳以下の男子、中学校卒業、専門学校入学検定試験合格、同無試験検定、工業学校卒業、師範学校卒業のうち、ひとつの資格を有する者である。彼は、朝鮮で中等教育を終えているだろうから、入学資格はあったと考えられる。し

かし、日本に来て最初に学んだ学校は東京美術学校ではなく、川端画学校である。

川端画学校は、東京市小石川区下富坂町19にあった。彼が挿絵家として年鑑に名前が記載されたときの住所も小石川である。川端画学校は1909年に創設され、認可された私立の美術教育機関のひとつであり、官立美術学校の予備校でもあった。そのため、東京美術学校への入学規定にある中学校卒業相当の資格を得る目的で川端画学校に通う者も多かった。入学条件は、1923年の書籍によると高等小学卒業以上の学力ある者は無試験入学ができた。入学期は4月、9月、1月で、夜学部は3月であるが、欠員のあった時は、随時入学を許していた。彼が入学するところには条件が変更されている可能性があるため、彼の年齢に近い1934年出版の書籍でみると「日本画（高小卒業以上）洋画（一年以上実技を修得せる者及び中学三年以上の学力ある者）」が条件となっている。彼は洋画を勉強するために日本へ来ていることから、洋画コースであるだろう。本郷にあった看板屋へ就職していたことから、夜学部に通っていたのだろう。1929年に来日したのであれば、1930年3月に入学したと考えられる。もし欠員があったのなら、1929年に入学したかもしれない。川端画学校は日本画家の川端玉章が創設し、多くの日本画家、洋画家を輩出した戦前の私学の美術学校であった。出身者は画家だけでなく、映画監督の黒澤明、漫画家の小島功、加藤芳郎、アニメーション作家の山本早苗など、当時「新しい」芸術的な職業につく人々を輩出した。日本人だけでなく、朝鮮、中国、台湾からの留学生も少なくなかった。朝鮮の挿絵、漫画家として活躍し、解放後の朝鮮において金龍煥と同じ新聞や雑誌で活躍した熊超こと金奎澤

も川端画学校で勉強した一人である。

金龍煥の最後の書籍となる1998年出版の『絵で見る韓国の歴史』のプロフィール欄に「1934年、帝国美術大学卒業」と記されている。プロフィール欄には最後の学歴を記するのが常である。川端画学校のあと、帝国美術学校へと通ったのだろう。帝国美術学校は、現在の武蔵野美術大学、多摩美術大学の前身であり、いまでは大学機関となっていることから大学と翻訳されたのだろう。実際、韓国で1990年に出版された書籍『코추부 (コチュブ) 時事漫画集』では帝国美術学校卒業と書かれている。先に引用した「私が東京に来て三年目の一九三一年に、西荻窪に開校したばかりの私立帝国美術学校（帝国大）に梁君と二人で入ることができた」とあることから、川端画学校を経、1931年に入学すれば年号が符合する。東京美術学校を志望していたが、入学したのは帝国美術学校であった。東京美術学校を受験したのか詳細は不明である。しかし、1933年のデビューを鑑みると1931年に帝国美術学校入学で間違いはないだろう。

帝国美術学校は、東京市外武蔵野吉祥寺320にあった。1929年10月30日、帝国美術学校は東京府の認可による各種学校として創立された。つまり、金龍煥が来日してから創立した新しい学校である。当初は専門学校として計画されたが、条件としての財団法人設立の資金が調達できず、各種学校としてスタートした経緯がある。北宏二のペンネームは帝国美術学校の初代校長の北吟吉からとっている。洋画科の募集人員毎年約70名、入学試験は実技と口頭試問であった。試験課題は木炭画による石膏像の写生であった。1931年度の試験課題は見つからなかったが、1932年度の資料はあった。課題はヴィーナス、アグリッ

パ、ブルータスの頭像の中の一つを選んで写生することだった。入学資格は「本科第一部及師範科は、中学卒業者。専門学校入学者検定規定ニ依リ一般専門学校ニ関シ指定セラレタル者。専門学校入学者規定ニ依リ試験検定ニ合格シタル者。」となっていた。本科は5年間（創立時は4年間）であった。川端画学校同様、夜間部に入ったのかもしれない。入った時期により、卒業は可能であったかもしれないが、正規の卒業であったかは疑問である。帝国美術学校は1935年に学校紛争となり分裂している。それが現在の武蔵野美術大学と多摩美術大学のスタートとなっている。1932年の冬頃にはすでに不協和音が響いていたことから、金龍煥が在籍した時期は、内紛が表面化されつつあったはずである。そのため当時の学生には大きなインパクトを残している。しかし、金龍煥のエッセイではその記述を見つけれない。

台湾からの留学生・洪瑞麟

金龍煥の学歴は、本人のエッセイに頼ったものであり、客観的な記録が見つからなかった。当時、厳密な卒業資格は重要であったとも考えられない。ましてや職業挿絵家、漫画家であった金龍煥にとり、学歴など関係ない。ただ日本における活動経歴の手掛かりとなる。

川端画学校はいつ頃からなくなり、戦後には記録としては残されているが、詳細がわからない。もちろん入学記録も卒業記録もすべてが残されてはいない。前述したように多くの著名人を輩出していることから、伝説の画学校としての川端画学校は存在していた。またそこで勉強した者による記録をたどることで、どのような教育をなされていたかがわかる。彼のエッセイでも、先生のこと、どの

ような美術活動をしていたのかが記されており、川端画学校の一端を知ることができる。帝国美術学校は川端画学校よりも後に創立されたこともあり、入学者や卒業者の記録は残っている。しかし、1935年に学校が分裂したことにより、すべての記録は残っていない。現在のところ、金龍煥の記録は見つからないが、幾人かの留学生の記録はある。そのなかでも詳細にわかっている人物がいる。それは台湾の炭鉱夫画家として有名な洪瑞麟である。朝鮮と同じく、日本統治下の台湾からきた留学生である。台湾にも美術を専門に勉強する学校がなかったため、内地の美術学校を目指し来日した。

洪瑞麟は、金龍煥と同じ1912年生まれ、1930年に来日している。帝国美術学校での試験科目の素描を鍛えるため、川端画学校へ通っている。彼は1930年秋の第四回台湾美術展覧会にて入賞している。そして1931年帝国美術学校西洋画科へ入学し1936年に卒業し、台湾へ戻っている。洪は1931年12月に発行されている「学友会誌第一号」のなかで本科・西洋画科に名前が記載されている。洪瑞麟と同じ時期に金龍煥も入学していることから、同級生になる。加えて、川端画学校でも同じ教室にいたと考えられる。残された記録によると、解放後の朝鮮において活躍した画家もいたが、金龍煥の名前は見つからない。

挿絵家という職業

東京美術学校を目指し来日したこと、川端画学校、帝国美術学校で勉強したことから「画家」になるため日本へ来たと推測していた。当時の画家の卵たちは、日銭になる紙芝居やデッサンをいかした挿絵や漫画を描いていた人が多かった。金龍煥より一世代上の漫画家

である岡本一平、近藤浩一路、小野三世男、池辺欽は、東京美術学校出身者であり、彼らは漫画家を目指していたわけではない。日本画家や洋画家となるべくして、学校へ通っている。しかし、挿絵や漫画で頭角を現し、その職業へとつながっていった。近代化により新聞や雑誌の需要が大きく飛躍したことも手伝い、画家を諦め、挿絵家や漫画家になる人が多かったことから、金龍煥も同じように推測していた。しかし、そうでないのかもしれない。金龍煥は幼いころから、日本の少年雑誌を熱心に読んでおり、挿絵家の樺島勝一に憧れていた。また、師匠に選んだのも挿絵家の江島武夫である。そしてなによりも日本にきて、短期間で挿絵家としてデビューをしている。以前の論文で検証した1933年の『カナイソップ』が最初の書籍であるのなら、帝国美術学校在学中に描いていることになる。

1933年に『美術家を志すには』という、若者のための職業選別の書籍が出版されている。そのなかには、「挿絵家になるため」の道が具体的に書かれ、どのようなからくりでお金が入ってくるのかも教えてくれる。つまりこの書籍が出版された1933年には、人気の職業として確立していた。漫画家、挿絵家になりたい者は、日本画か洋画か、一通り絵画の技術を取得しねばならない。日本画の技法から学びたい人は「日本画家になるために」を、洋画の技法から学びたい人は「洋画家になるために」を読むように指南してくれる。そこには東京美術学校、川端画学校、帝国美術学校へ進学するための資格と試験についても書かれている。また漫画家と挿絵家は、他の美術家との職業的性質が異なっている点も加えられている。それは、ジャーナリズムと非常に関係が深く、先輩友人の手掛かりや推薦によ

り、新聞、雑誌社と関係を結ばなければ、職業として成り立たない。あるいは新聞、雑誌への投稿も認められるきっかけとなると教えてくれる。指南書の道を金龍煥は歩いている。川端画学校、帝国美術学校と、一通りの絵画の技術を身につけ、友人の伝手をたどり、挿絵家・江島武夫に師事している。私の調査では、1933年5月に出版された『カナイソップ』にて「北宏二」の名前が掲載された最初であった。もちろんそれ以前にデビューしている可能性はおおいにある。この書籍には「挿絵・江島武夫」とあり、その下に「北宏二」の名前がある。『カナイソップ』の監修者は、巖谷小波である。巖谷は明治、大正にかけての児童文学の重鎮であり、1933年の9月に亡くなる。巖谷のような大物と21歳の若者が一緒になる。巖谷のような名前を並べている。また、単なるアシスタントの名前を書籍に記載したことも不可思議である。現在でもアシスタントが師匠の作品を手伝ったとしても、名前など記載されない。そして、雑誌『日本少年』の主筆・二宮伊平へ挿絵を持ち込むことで、人気雑誌の挿絵家へと1934年から駆け上っていった。それにしても1929年に日本に勉強へきて1933年にはすでに重鎮と名前を並べ、仕事をしていることを考えると日本に来てから、非常に早く挿絵家として、活躍の場を得たこととなる。

1959年、再び日本へ

1950年6月から1953年7月まで続いた朝鮮戦争をも乗り越え、金龍煥は韓国でも旺盛に新聞、雑誌の仕事をしている。この時期の新聞や雑誌はあまり探せなかった。出版社が大邱や釜山に移ってきていることもあり、散逸してしまっている。しかしながら、朝鮮戦争中ですら雑誌『少年世界』には連載を重ねて

いる。『少年世界』のように多くは探せなかったが、『ソウル新聞』『新太陽』『学園』でも連載をしている。

休戦後、またもや多くの連載を抱えることになるのだが、そのなかでも彼の軌跡を最も表すことになるのは、英字新聞『THE KOREAN REPUBLIC』の仕事である。1953年8月15日に創刊された『THE KOREAN REPUBLIC』は『The Korea Herald』と改名され現在でも発行されている。朝鮮戦争後の英字新聞であることから、察しのとおりアメリカ資本の新聞である。当時の韓国は、朝鮮戦争後の廃墟にたたずむ戦争報道を通じてのみ世界に知られていた。そこで民主主義へと変わりつつある韓国の姿を海外へ広報するための機関誌でもあった。英字新聞であったにせよ、韓国への民主主義定着をもたらすものであり、一面には当時の大統領・李承晩の写真が頻繁に掲載されている。誌面で任されていたのは、風刺画とコマ割り漫画である。漫画は、彼の代名詞ともなっている「コチュブ」であった。創刊号には掲載されていないが、すぐに風刺画、9月9日にコチュブの三コマ漫画は掲載される。「1959年、私は米軍の要請で東京にある米第七心理戦局視聴覚課に働くことになった²⁾。」とある。当時、金龍煥が連載していた新聞、雑誌から彼の連載を辿ってみると、1958年には新聞では『THE KOREAN REPUBLIC』のほかに『東亜日報』、雑誌では『学園』『アリラン』『少年系』『女苑』がコンスタントに掲載されている。『少年系』は資料が少ないため、それ以外の掲載作品をみると、『女苑』は1955年10月の創刊号から掲載されている。1959年2月号の掲載ページをみると、投稿漫画の作品選考をしている。それが『女苑』の最後ではないかと推測して

いる。雑誌『学園』と『アリラン』は金龍煥のためのものではないかと疑うほど多く、長期にわたり掲載されている。『学園』は1953年1月号から掲載を見つけている。ここでは単行本にもなっている「コチュブ三国志」の3回目の連載がある。『学園』は少年、少女を対象とした雑誌で、挿絵も多く金龍煥にとっては昔取った杵柄といえる。1959年4月号のペン画「バビロンの古代文明」が最後ではないかと思われる。『アリラン』は1955年3月に創刊されている。この雑誌でも「コチュブ」は連載されている。創刊号は見つからなかったが、次号の4月号は見つけることができた。そこには7作品も掲載されている。挿絵家や漫画家がまだ少ない時代とはいえ、金龍煥頼りであることがわかる。ここでは1959年9月号に連載された「コチュブ」が最後であった。『アリラン』は欠番が多いことから、この後も掲載はあるかもしれない。『東亜日報』では、コマ割り漫画「マクドンの旅行記」が連載されている。1959年5月20日付の漫画のなかでマクドンは「皆様、アメリカ一周のマクドンの旅行記は一旦終わりです」と言っている。この日を最後に金龍煥の連載はなくなる。

『THE KOREAN REPUBLIC』ではコチュブの連載は、1960年12月31日まで掲載される。しかし、風刺画はそうではない。社説にもとづかねばならず、それを書いている人の隣で仕事をしていた。現在のように通信が発達しておらず、ましてや韓国と日本では国交がない時期である。タイムラグのない風刺画を描いている間は、日本に来ているはずはない。風刺画は署名があるため、本人と特定しやすい。しかし、一時期アメリカへ行っていた間、他の挿絵家が筆致をまねて描いており、キャ

ラクターもそのまま踏襲されていた。一見しただけでは作者が変更されたことがわかりにくい風刺画となっている。1959年8月17日付の風刺画が、最後ではないかとつきとめた。8月18日から署名は「Ahm」となり、署名がないときもある。1959年8月18日を境に『THE KOREAN REPUBLIC』での風刺画は、誌面の上部におかれることは少なくなり、サイズが小さくなっていった。そして風刺画自体がなくなっていった。「コチュブ」の漫画はこのあとも掲載されている。1953年の9月9日から1960年12月31日まで掲載されている。「コチュブ」掲載中の1958年6月2日からアメリカの漫画「ピーナッツ」も掲載されはじめる。1958年6月2日から1960年12月31日までの期間、四コマ漫画が同時に二つ掲載される。「コチュブ」の掲載がなくなった後も「ピーナッツ」は掲載され続けた。これは「コチュブ」が誌面からなくなることを見越していたのかもしれない。金龍煥の風刺画がなくなったあと、なぜ「コチュブ」だけ掲載され続けたのだろうか。『女苑』『学園』『アリラン』『東亜日報』では、次第に金龍煥の風刺画、挿絵、漫画などが掲載を終わらせていた。『THE KOREAN REPUBLIC』の風刺画のようにコチュブも他の作者が「金龍煥風」に描いたのではないかと思ったが、四コマを代筆して描くことは可能ではないように思っていた。そこで金龍煥の弟子であった蘇在必氏に伺ったところ「『THE KOREAN REPUBLIC』の会社、大韓公論社の編集長イギフン経由でアメリカ軍への要請がもたらされた。条件が良かったので金先生は乗り気であったが、会社側が反対であった。また、日本と国交がないこともあり、旅券問題もあることから李承晩大統領にもこの話がいった。李承晩大統領は「コチュ

ブ」のファンで誌面から掲載がなくなることから、やはり反対した。そこで金先生が日本に行ってしまうと、6か月から1年の間は「コチュブ」の漫画を韓国へ送り、連載を続けるようにした。」とのことである。国交がないにもかかわらず、金龍煥が韓国にいなくとも「コチュブ」の連載ができたことを裏付けることとなった。また、いかに「コチュブ」が国民的キャラクターであったのかも理解できた。金龍煥のエッセイのなかでも、日本へと戻ってきた経緯が書かれている。

ヤングリン少佐からの交渉があった数日後、景武台を退出したグレン博士は、李大統領も、君が日本に行ってしまうと、コリアンリパブリックの漫画をかく人がいなくなるのでわたしの米軍就職に反対した³⁾、

このような経緯で、1959年8月に在日米軍司令部傘下にある、VUNC（国連放送局）の視聴覚課に就職、立川の米軍飛行場に降りた。『THE KOREAN REPUBLIC』の最期の風刺画が掲載された1959年8月17日以降に、戦後の日本へと再度来日した。

おわりに『자유의 벗（自由の友）』

VUNCは韓国動乱の中、対中国、北朝鮮向けの放送や宣伝製作のためスタートした。米極東軍傘下の対敵宣伝機関であった。ラジオ放送を中心とした国連放送局であり、この組織の中に出版部があり、すでに弟の金義煥がビラやポスター等を描いていた。この『自由の友』の挿絵、漫画を描く仕事であった。これは金龍煥のプロフィール、エッセイ、彼について書かれている書籍には記述されている。米第七心理戦局視聴覚課は沖縄に本部があり、

東京とソウルに支部があった。後に、東京の放送関係は全部沖縄に移り、東京では韓国に無料配布する約30頁のハングル雑誌『自由の友』やカレンダー等を作っていた。企画編集は一切ソウルで行われ、送ってくる原稿を英語に翻訳し、コピーをとったあと、横浜日吉にあった米軍総合印刷所で印刷製本し、韓国に送る仕事であった。

『自由の友』は、欠番がいくつかあるが、1955年の創刊号から1971年の1号まで調査することができた。調査をした際「この仕事のためだけに日本へと戻ってきたのだろうか」と感じていた。1959年になると、雑誌は写真が多用され、挿絵や漫画がそれほど必要であったのか疑問であった。1958年まで表紙は、絵で描かれているが、1959年からカラー写真へなっている。その時期に、金龍煥は再度来日している。見事なペン画が掲載されており、韓国の新聞や雑誌ではここまでの印刷はできなかっただろう挿絵が掲載される。本人のサインがないものでも、金龍煥と一目でわかる出来栄である。『自由の友』は韓国国民の民主主義の啓蒙雑誌である。民主主義の啓蒙により、対中国、北朝鮮、ソ連を見据えている。つまり危険をはらんでいることから、挿絵に署名が描かれていないことが多い。筆致で明らかに金龍煥だとわかるものもあるが、わからない挿絵や漫画も多い。しかし、筆致が異なり、他の漫画家が描いたおもしろい作品も多かった。そこで、韓国へ行った際、古い漫画の鑑定もしている漫画家の重鎮、パクキジュン氏にみてもらった。推測したとおり、金龍煥の挿絵は少ない。そのことについて次の機会に記していきたい。

注

- 1) 金龍煥「画筆五十年（第一回）」『統一日報』統一日報社、1979年4月20日。梁君とは画家の梁達錫を指している。
- 2) 金龍煥「画筆五十年（第五十五回）」『統一日報』統一日報社、1979年7月10日。
- 3) 金龍煥「画筆五十年（第七十三回）」『統一日報』統一日報社、1979年8月7日。

参考文献

- 伊藤忍軒『入学就学独学成功法』光文社、1923年。
- 中川紀元・横川毅一郎『美術家を志す人のために』現人社、1933年。
- 小林喬『小学卒業立身案内』帝国教育出版社、1934年。
- 金龍煥「画筆五十年（第一回）」『統一日報』統一日報社、1979年4月20日～8月8日。
- 金龍煥『코추부 (コチュブ) 漂流記』隆盛出版、1983年。
- 日本読書新聞社編『雑誌年鑑昭和十四年版』大空社、1988年。
- 監修・イラスト金龍煥、監修・文章千寛宇、翻訳金容権他『絵で見る韓国の歴史』エムティ出版、1993年。
- 浅野智子「川端画学校について 画塾から画学校へ」『芸術学研究 第8号』筑波大学大学院博士課程芸術学研究科人間総合科学研究科、2004年。
- 부천만화정보센터 엮음 (富川漫画情報センター 編者)『三八線 블루스에서 성웅 이순신까지 (三八度線 ブルースから聖雄李舜臣まで)』현실문화연구 (現実文化研究)、2005年。
- 武蔵野美術大学八〇周年記念誌編集委員会編『武蔵野美術大学のあゆみ1929-2009』学校法人武蔵野美術大学、2009年。
- 森美根子『台湾を描いた画家たち 日本統治時代画人列伝』産経新聞社、2010年。
- 鳥越麻油、森克之編集『武蔵野美術大学九〇周年記念 帝国美術学校の誕生－金原省吾とその同志たち』武蔵野美術大学美術館・図書館、2019年。